慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山田盛太郎著 日本農業生産力構造
Sub Title	The mechanism of agriculture in Japan, by Moritaro Yamada
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.5 (1961. 5) ,p.425(79)- 427(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19610501-0079
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610501-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ル』の最大関心事であった。例えばモンドヴィルのジァン・フェスーの場合。彼は賃借料を七年間支払わなかったので差押えを受けそうになった。そこで彼は土地一〇アルパンを売って滞納金一、三〇〇リーヴルの半額を支払おうとしている。『ラブルール』にとって役畜を失うことは最大の苦痛であったのである。彼本来の保有地は売ってもいい。しかし経営に必要な手段たる役畜は失うまいとしたのであった。この態度は『ラブルール』の上層に著しくみられた。彼が何よりも小作地の経営を問題にしていたためにほかならない。

以上においてバス・エソンヌ地方の『ラブルール』の具体像を伝えた。それを要約すれば。

【終りに】『ラブルール』の間にも顕著な階層分化がみられた。『ラブルール』の上層。彼の関心は小作地の経営を引受け、それをできるだけ増加することにあった。従って役畜の拡充が彼にとっては問題である。なかには彼の引受けた小作地に比して桁外れに多い役畜を持つ者があった。これは明白に彼が役畜の賃貸に従っていたことを示す。いわば彼は農業における企業家であった。

『ラブルール』の下層。彼は『ラブルール』上層と正反対であった。彼もまた小作地の引受者であった。しかし彼の重点は彼本来の保有地の拡大にあった。農業経営で得たものを彼は保有地の拡大に投じた。彼は役畜の拡充に大した魅力を感じていない。彼は耕作農民としての途を選んだのであった。

しかし当時において農業経営は甚だしく不安定であった。にもかかわらず『ラブルール』にとって農業経営を続けるほかなかった。『ラブルール』はこの苦境を打開すべく他に収入の途を考えなければならなかったのである。商人化の方向は彼のこの努力の一端を示すものにほかならない。彼はまた領主権の引受者たらんとした。特別熱心に彼はそれをめざした。領主権は彼に恒常的に一定の収入をもたらすはずであった。従って領主権を賃借する条件は『ラブルール』にとって苛酷なものとならざるを得なかった。時には彼の農業経営の存立を危険に追込むほどであったのである。

本稿はParis et Ile-de-France, Mémoires, tome IX (1957—1958), p. 157—282 から『ラブルール』に関する記述を拾って紹介したものである。十七世紀に『ラブルール』は領主の代理者的存在となった。しかしこの領主は従来の領主と違う。従って『ラブルール』の登場は領主制の変質の結果であった。彼は小作地の『フェルミエ』としてこの領主に従属した。と同時に彼は保有地を追われた農民を小作地の経営に吸収する者として村に君臨した。『ラブルール』についてこの二重性格は否定できない。

書評

山田盛太郎著『日本農業生産力構造』

寺尾誠

本書は「日本資本主義分析」の著者山田盛太郎氏を中心とする共同研究の成果である。その主なねらいは農地改革以前に支配的であった地主的土地所有とその下での零細農民経営、農地改革期の地主的土地所有の廃止と農民的土地所有の成立といった日本農業の段階的発展の過程で、終始農民に担われてきた農業生産力がいかなる変化をとげ、いかなる矛盾に逢着してきたのかを究明するところにある。このような問題意識の下に第一部総括篇において山田盛太郎氏が第二部の実態把握に基いて「日本農業生産力構造の構成と段階」を叙述される。

この代表的論文においては、二つの分析視角が前提とされている。すなわち第一に日本農業生産力の発展段階を江戸時代における純粋封建的土地所有の段階、半封建的土地所有の段階、地主的土地所有解体後の段階の三つに区別する。第一に封建的土地所有の段階では、生産力は藩、知行地、村といった風に分断されていた。これに対し地租改正を契機として成立する地主的土地所有の段階では、それまで分断されていた生産力は一応全国的な拡りへと再構成された。そしてこの地主的土地所有が、これに対応する零細小作農民経営の生産力上昇の桎梏と化しきって、戦後の農地改革で廃止された第三段階においては、農民的土地所有の下での農業生産力の上昇が可能となる。

このような発展段階的な把握の仕方と共にもう一つの分析視角として日本農業の地帯区分があげられる。すなわち地主的土地所有段階において二つの対極としてあらわれた地帯として東北、新潟の千町歩地主制の地帯と近畿＝瀬戸内の高位生産力地帯が指摘される。前者は原生的段階（明治初期）において北部関東、山陰、南九州と共に抱持立て犂で馬耕する所謂馬の地帯であり、農業の生産＝再生産＝蓄積が基本的に農村内部で進行する。そしてこの蓄積の余剰は農民経営の上にそそりたつ大地主の下に吸収されてしまう。

これにたいし、後者は長床犂で牛耕する牛の地帯であって農業での再生産＝蓄積は主として外囲との連関で、或は外部からの働きかけで進行する。そして地主的土地所有に対し農民経営の自立性が第一の地帯に比べ高く、高位の生産力水準が特徴的であり、農地改革前にすでに機械化が進行していた。

さて山田氏は発展段階と地帯区分という二つの分析視角に照して日本農業の生産力がその担い手である農民経営においてどのような変化を歴史的にとげてきたかを究明する。すなわち大地主的土地所有の下に生産力が停滞的にしか発展しなかった東北、新潟地帯に対し、近畿、西南地帯では地主的土地所有に対する農民経営の相対的

優位から農地改革前に既に高位の生産力水準に達していた。このような地帯別の特殊性は農地改革後の農民的土地所有段階にもひきつがれる。すなわち農地改革は地主的土地所有の強力な存在（千町歩地主制）の下に農民経営が圧迫されていた東北、新潟地帯において農民経営の自立化を実現することにより、生産力水準の飛躍的高揚をもたらしたが、農地改革前に既に地主的土地所有への抵抗として農民経営の高位生産力を実現していた近畿、西南地帯では農民経営規模の零細性の限界が改革後いち早くあらわれ、生産力はむしろ停滞的な発展に留ってしまっている。と同時に生産力の飛躍的発展のみられた東北、新潟地帯においても農業における機械化の進展と共に、農民経営の限界性があらわれ、生産力のより一層の発展は農民層の分解を通じて、経営規模の拡大＝農業資本の蓄積によって初めて可能となる段階に到達しつつある。ここに全国的に農地改革から農業変革への過程が進行し始めたといいえよう。

このような基本的分析に基いて山田氏は地主的土地所有、特にその極限たる千町歩地主制の分析を行う。千町歩地主制は、数名乃至数十名の事務機構を邸内にもち、その統轄化に数十名の差配＝小作者監督を配置し、小作農千数百戸乃至二千数百戸を隷従せしめている一大経済単位である。

このような地主制の典型としては歴史的由来が最も古く江戸時代の豪族＝鉄師である島根の田部家を筆頭に、幕末期に既に千町歩の規模に達していたもの（山形庄内の本間家、新潟蒲原の市島家）、

旧幕期に淵源はもつが、明治期に至って千町歩の規模に達したもの（宮城仙北地帯の斉藤家、秋田仙北郡の池田家、さらに原始的蓄積の段階において開墾、干拓で成立した後来的農場（北海道の千町歩地主、岡山の藤田農場）の四つの類型があげられる。第一の田部家が尨大な山林原野の占拠に基いて、製鉄業と地主という本格的ユンケル的経営形態をとったのに対し、第二、第三の新潟、東北地帯の地主制は、基本的農業地帯に深く根ざし長年の農業生産の発展段階をへて土地集積を行ったものであり、第四の地主制は開拓その他で新たに創設されたものである。第四の形態が原始蓄積期の国家政策といかに密接な関連をもっていたかは、第二、第三の自生的な大地主制と比較した場合、第四形態における公租、公課の大巾免除という事実で明白であろう。

さてこのような四類型の大土地所有制は島根の田部家を除き、大正中期以後の農民運動の高揚によって夫々再編成され、農地改革において最終的に解体する。とくにこの点で特徴的なのは、国家政策の被護の下に一団地の巨大農場として出発した第四の類型においては、労働力の大規模な結果による本格的経営という形態からして当然大規模の農民斗争を必然化し、これに基いて地主制の再編成が行われるに到る。これとは逆にその対極にあるのが島根の田部家であって、これは農地改革の激動の中でも残存し現在に到っている。

最後に山田氏は現在時点の農民層分解の分析視角を示される。彼は第一に農業生産力の発展に対し、農家の家族家計費がより急速に増大していることに生産力と零細農耕の矛盾の集中的表現を見出し、租税公課を差引いた農業所得だけで家計費を償いうる耕地面積を計算し、これを中農の上限と規定する。そして農外所得を加算して家計費を償いうるギリギリの線を中農の下限とする。さらに彼は第二に雇傭超過が一農家一人当りとなるところを中農の上限とし、雇傭超過が0となる点を下限とする。このような独特な二重の階層規定に基き、家計費増大に伴い、中農の存在基盤が狭隘化し、貧農層への転落と賃労働者化の傾向が広範にあらわれると指摘する。

以上のような日本農業の歴史的総括が、極めて重厚な実証によって裏づけられていることは、本書の最大の強みである。とくに分析視角の明確化の上に、農業生産力が土地所有形態の変化と共にどのように変化し、どのような矛盾に突き当ってきたのかという基本的な問題意識が、豊富な資料分析の内に貫ぬかれている点が注目される。

但し本書の中心的分析視角たる土地所有の発展段階と地帯別の特殊性が、明治以来の資本主義経済の発展、とくに農業部門に対応する国内市場との関連、諸産業部門との関連において商品生産としての農業という視点からも究明される必要があるが、この点は最後の補論で若干説明されているに過ぎない。（岩波書店・A5・四二七頁・一一〇〇円）

アラム・ヴァルタニアン著『ラ・メトリーの人間機械論』

（Aram Vartanian; La Mettrie's L'homme Machine; A Study in the Origins of an Idea, 1960, Princeton Univ. Press. pp. 264.）

野地洋行

一

およそ人類の歴史の上で、十八世紀啓蒙期のフランスほど多彩に思想的人材を生み出したことはかつてなかったのではなかろうか。それはやがて開かれる資本主義社会への夢と可能性を一杯にはらんでいるもののごとくである。だが、しばしば〝百花撩乱〟といった風に形容される十八世紀啓蒙思想家たちは、かえってその多彩さのゆえに〝啓蒙思想家〟としてあまりにも一括され、かつ不当にその個性を埋没させられてしまう傾向があるように思われる。もちろん、ラスキなども指摘するように啓蒙思想家たちを、重農学派（経済学）、百科全書派のいわゆる啓蒙哲学者（哲学）、および社会主義者の三つのグループに分けて考えることができる。しかもたとえば、その一つである唯物論哲学に関しても、その代表者であるディドロ、ドルバック、エルヴェティウス、そしてラ・メトリーらが、それぞれど